広島県心不全患者包括ケアネットワーク連携支援事業

第５回　広島県心臓いきいき症例検討会（広島大学病院主催）

2023 年 8 月 24日(木)19:00～20:30　広仁会館にて参集

令和5年8月24日(木)19 時から、第5回広島県心臓いきいき症例検討会が広島大学広仁会館にて、参集により開催しました。テーマを『地域へつなぐ心臓リハビリテーション』とし、教育講演、グループワークによる事例検討を、広島大学病院圏域にある心臓いきいき連携病院と在宅支援施設に所属する地域医療関係者、34 名の参加をもって行いました。

開会の挨拶を心不全センターセンター長である中野由紀子教授に賜りました。

残暑厳しい中、研修会へ参加された方々への謝辞と期待を述べられ、幕が上がりました。

第一部〈教育講演〉タイトル：『地域の病院での心臓リハビリテーションについて～院内・院外の多職種連携の大切さ～』

講師　広島中央保健生活協同組合　福島生協病院　診療部　内科部長　高岡　克寿　先生

講演では、心臓いきいき連携病院の認定を受け、院内における多職種協働による包括的心臓リハビリテーションへの取り組みとして、多職種カンファレンスの実現に向けた軌跡が紹介されました。

福島生協病院では多職種カンファレンスの立ち上げと同時期にコロナ禍となり、感染対策への人員確保を要する状況となり、活動は一旦休止を強いられました。コロナ対応がやや落ち着いたタイミングで再開を目指しましたがカンファレンス参加者への個別の声掛けでは業務調整も進まず、院内全体の気運の低下が否めない状況でした。そこで、病院の管理部会議で、この活動の意義を高岡先生は訴えられ、結果、多職種カンファレンスが院内全体による定例会議として位置付けられ、必然的に各関係部署からの参加が可能となりました。高岡先生は、「広島県心臓いきいき推進事業へ参加することは、地域の回復期を担う病院として重要な社会的任務だ。」と会議で訴えられたこと、熱く語られました。

また、多職種カンファレンスは、ただ情報を持ち寄り、報告する場ではなく、スタッフが主体的に患者に関わり、協議を行う場であることを高岡先生は目指され、カンファレンスでは、主導する立場ではなく、スタッフからの意見に耳を傾け、それぞれの考えを支持する立場に徹しているとのことでした。その後の質疑では、スタッフが主体的に取り組むようになる意識改革はどのような働きかけがあったのかという質問があり、高岡先生は、以前より、院内での学びの機会では、専門職の学びの在り方に関する知見のもと、自らが教える立場になることをスタッフに働きかけ、その経験が主体的なかかわりを持つことの土台になっていると答えられました。他に質疑では、カンファレンスの進行に関する質問のほか、このような活動に参加するスタッフのモチベーションは何かと問われ、中には資格の取得を目指すスタッフもいることが紹介されました。

第2部〈事例検討〉グループワーク(5グループ)

症例提供は教育講演に続き、高岡先生より行っていただきました。

症例は80歳代女性、TAVI 後、入退院を繰り返す症例で、現状を打開するために、訪問看護、訪問看護への指示書を出しているクリニックの医師の参加のもと、院内関係者も集い、院内院外合同カンファレンスを開催するという設定です。

ワークは、①カンファレンスで自分ならどのような意見をのべますか　②病院から地域へ、そして地域の中で連携するうえで、どんな情報が必要でしょうか　③連携する上で、大切にしたい事柄、現状では難しいと考える状況などありますか　の 3 項目を論点に行われました。

①のワークでは、再入院をしないための支援を念頭に、介護者の支援状況の確認、服薬コンプライアンスの改善の提案、生活環境を整えていくための介護保険サービス導入や、体調悪化時の相談時期の伝達等多くの意見がでました。

②のワークでは、病院に入院中の教育情報や検査データー、セルフモニタリング時の心不全手帳等の共有ツールの活用、訪問看護が入る場合は、指示書発行の病院の情報が必要との意見がでました。また、入院対応の病院から、在宅側に情報連携した際に、どのくらい情報が生活状況と相違なく活用の可否のフィードバックがあると、より生活実態に沿った支援策の検討につながるのではないかとの、意見がでました。

③のワークでは、本人や家族の思いを尊重していくことが大切。地域では職種間の容易な連携は難しいことが多く、ケアマネを窓口として情報共有が速やかに行われることが望まれるとの意見が多くあった。

30 分のグループワークは、どのグループも活発な意見交換がなされ、充実した時間となりました。

最後は高岡先生より、症例の顛末をお話しいただきました。患者、家族の生活のニーズに沿い、なおかつ生活支援に直結する体制の在り方を常に PDCA サイクルを回しながら、共に検討を行うことの大切さを教授いただきました。

参加者の声（研修会終了後アンケートより一部抜粋）

- 在宅で心リハを行う際、個別のデータ（CPX など）がないことが多く、安全性や効果を担保することが難しい。
（訪問看護ステーション、看護師）
- 病院内でのリハビリを、在宅環境下でどのように継続していくか、悩む。在宅でも簡便に測れる数値での目標が欲しい。
（訪問看護ステーション、理学療法士）
- 他院のカンファレンスの状況を知ることができて良かった。各職種が、主体的に参加する工夫を考えていきたい。
（病院、理学療法士）
- 多職種介入が、心の負担の分散となるという考え方もあると、気付かされた。（訪問看護ステーション、作業療法士）
- 教えることで、自分の学びになる。（居宅介護支援事業所、介護支援専門員）
- 職種によって、様々な視点があることに、改めて気付かされた。（病院、医師）
- 心不全手帳の有無について、声掛けをしていきたい。（保険調剤薬局、薬剤師）

皆様には、高温多湿のなか、汗を流しながら、大変多くの方にご参加いただきましたこと、深く感謝申し上げます。今回の研修では、心不全患者の院内、院外連携の構築とシームレスな情報共有の重要性について意見交換し、有益な時間を共有させていただきました。

広島大学病院　心不全センターでは、今後も引き続き、感染対策を講じながら、医療従事者向けの研修会等を開催致します。 皆様の積極的なご参加をお待ちしております。　【広島大学病院　心不全センター　事務局】